■肢体不自由のある子どもたちへの実践事例

自立活動におけるわいわい文庫の活用

愛知県立港特別支援学校
佐藤絢香

はじめに

本校は、肢体不自由児を対象とした特別支援学校です。本研究では、絵本が好きな生徒を対象として、自立活動や給食指導の時間に、iPadのアプリケーションソフト「ボイスオブデイジー」を使用した実践を報告します。

＊活動した学年：高等部1年普通科
＊主障害名：脳性まひ
＊学習形態：個別指導
＊本の名前：『パパンがパン』
『へんしんトンネル』など

対象となる生徒の実態

本生徒は医療的ケアを受けており、給食指導は胃ろうからの栄養注入を受けています。発声、発語はありませんが、表情を変えたり手を動かしたり、体全体を揺らしたりして、教師に呼びかけたり問いかけに応えたりすることができます。また、対象物やタブレット型端末の画面を注視できることもあります。腕を大きく動かすことはむずかしいですが、手首を動かしてひもを引っ張ったり、指に力を入れて物を握ったり、腕を振ったりすることもできます。自立活動の時間では、ロールクッションにまたがり座位を保ちながらタッチペンを使う学習や、絵本を1ページずつめくる活動をしました。

学習のねらい

本生徒は、本が大好きで、週末に学校の図書室から1冊の本を借りて、姉に読み聞かせをしてもらっています。絵本を通して表情が豊かになりました。さまざまなジャンルの本、絵本、電子絵本にふれることで、表情や支援器具を使ったコミュニケーションの幅を広げてほしいと考えて実践を行いました。

活用方法・ねらいについて

この生徒に対し、2つの時間設定とねらいをもって「わいわい文庫」を活用しました。

①自立活動の時間では座位をとり、絵本を見ることで、本人の視線が正面に定まり、自ら頭部を保持しようとすることをねらいとして「わいわい文庫」を活用しました。座位をとるこの生徒の前に書見台を使って机の上にiPadを置き、教師は後方から姿勢保持の支援を行いました。

②給食の栄養注入の時間には、絵本にふれる機会として「わいわい文庫」の活用を行いました。本生徒の前に書見台を使ってiPadを置き、絵本の朗読を流すようにしました。朗読が終わったら、左手に持つマラカスを鳴らして教師を呼ぶようにしました。

実践の結果

①座位をとっている間、初めは姿勢保持のために浮かない表情をしていて、顔を上げることが少なかったのですが、「わいわい文庫」の活用を繰り返し行っていくと、顔を上げ画面に注目し続ける姿が見られました。ページをめくる活動がないため、教師は姿勢保持の支援を十分に行うことができました。また、教師と生徒が同じ目線で絵本を楽しみ、コミュニケーションをとる機会が増えました。

②繰り返し行っていくと給食の時間への期待感をもつようになり、絵本の朗読が始まると笑顔になることが増えました。また、音声が止まったときには、左手のマラカスを鳴らして教師を呼ぶことが増えてきたように感じています。

おわりに

実践を通して生徒の表情が豊かになったり、物を使って教師を呼びかけたりとコミュニケーションの幅が広がってきたように感じます。

また、マルチメディアDAISY図書の読み上げや、自動ページ送りの機能を活用することで、教師は姿勢の保持の支援に集中することができ、生徒は楽しんで取り組むことができました。

その一方で、読み上げの音声や画面の大きさに困惑することがありました。紙芝居風で流すと、絵本のページが小さくなる文献があるので、画面全体に表示されるとよいと感じました。本を選ぶときの表示で、「絵本」、「図鑑」といったカテゴリー別で仕分けてあると、それぞれの学習に応じた文献が探しやすいのではないかと感じました。

この実践では、自動ページ送り機能がとても有効でしたが、タブレット型端末の画面をスワイプすることでページ送りができる機能があると、さまざまな実態の生徒たちがより主体的に「わいわい文庫」を活用することができるのではないかと感じました。

さまざまな障害をもつ生徒たちが、主体的にかつ意欲的に学習する支援機器として「わいわい文庫」はとてもよいと感じました。

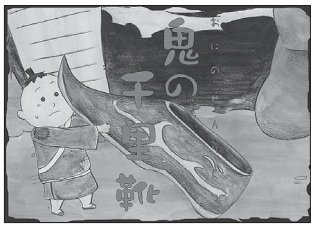
日本昔話の旅

〈 中部 〉

新潟県　みるなのくら

長野県　かものひっこし

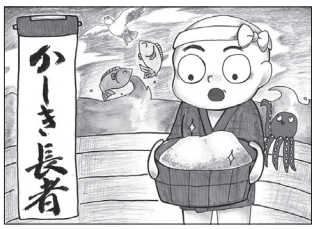
長野県小諸市　牛にひかれて



山梨県　鬼の千里靴

富山県　おじいさんとふしぎな光

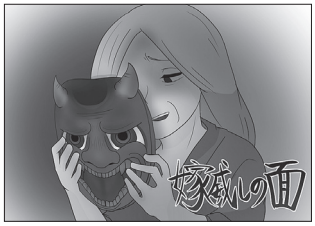
岐阜県　養老の泉



愛知県　かしき長者

愛知県田原市　膳貸し岩

静岡県　宇津ノ谷峠の十団子



福井県　嫁威しの面

福井県坂井市　東尋坊

石川県　長老むじな